

行動推定記録

文責：藤井良太 2009年5月23日

4月 7日 部会。GWの計画を話しあう。この時に鳴沢岳計画は出ていない。

4月上旬? 伊藤先生の鳴沢岳計画に安西が誘われる。

4月15日・22日 部会。山行計画報告のみ。安西の鳴沢岳計画参加。

4月23日

- ・伊藤→安西（メール16:29）「山は風雪になると思います。…」
- ・安西はスコップをワングル部から借りる。（藤井が北鎌で使用して返せていなかったため）
- ・安西は週間天気予報を見、二つ玉の低気圧を知っていた。

4月24日

・伊藤→櫻井・安西（メール9:20）「集合場所の変更 大津駅→近江八幡駅。共同装備としてコッヘルは伊藤がもっていく。午後5時ごろに荷物を車に積み込む」

・安西→藤井（メール15:08）

「かなり天気が悪そうなので（入山は）どうなるか…、とりあえず出発だけはする予定」

・小林先生・院生方の証言（報告書に記載する場合は承認がいる）

夕方6時ごろ、F2の研究室で櫻井が小林先生・研究生と山の話（「週末の山は天気が悪そう」

「小林先生の遭難談」）などをしているところに伊藤先生が来る。遅れて安西もザックを持って

くる。三人は少し話をし、安西は一回生2人と新町のボルダーに向かうために荷物を置いて帰る。

伊藤先生がその後荷物を車に積み込む。

・22時ごろに3人が近江八幡駅北口に集合し、伊藤（以下、敬称略）の車（インプレッサ）で高速を使い扇沢に向かう。無料駐車場に停め、仮眠をとる。

4月25日

黒部ダム7:50～黒部川8:05～内蔵助出合9:15～南東壁沢出合10:20～テント場(1570m)18:00

始発のトロリーバスに乗り、黒部ダムへ向かう。天気は小雨だが、視界はいい。別山山頂にガスがかか

かる程度。雪は去年の5月よりかなり少ない。日向斜面はほとんどブッシュが出ている。全員カッパ、ヘルメット・ピッケルを身につけ、伊藤は傘をさして黒部川へ向かう林道を下る。

歩く順番は、伊藤-櫻井-安西である（7:50安西写真=右=）。

8:04に黒部川を渡り（櫻井写真）、左岸を下る。9:14に内蔵助谷出合の少し上流の雪がつながった部分を渡る（安西写真）。

さらに左岸の雪渓上あるいは川沿いを下り、9:52に大タテガビン南東壁が見えてくる（安西写真）。

10:20、南東壁沢出合の少し下流（およそ1150m）でアイゼンをはき、ハーネスを着ける（伊藤写真=下=）。このあたりから雪渓を渡って鳴沢岳西尾根に取り付いたと思われるが、谷筋ほどGPSの精度は悪く軌跡が乱れているため正確な場所はわからない。この近くにある岩小屋に傘をデポした可能性がある。





西尾根の末端では雪がつながっておらず、ヤブこぎの登りになるため時間がかかる。ロープを使う場面が何度もあったと思われる。17:27に伊藤が南東壁を写真に撮っているが、GPSでは17:25に標高1534mとあり、ここまで高度差約400mを登るために七時間近くも費やしている。よほど急な登りか藪こぎがあったのではないだろうか。18:21に安西が南東壁の写真を撮っているが、18:05に標高1571mから標高がほとんど動いていないので、これはテント場所から撮影したものであり、おそらく18時頃に行動を打ち切り1570m付近の平地にテントを張ったと考えられる。

20:30には伊藤のGPSの電源が切られている。



①4/26 6:25 テント(1570m)撤収

4月26日

テント場(1570m)6:30～エスケープ分岐(2000m)9:20～ジャンクションピーク(2300m)～主稜線14時すぎ～遭難

5時頃に起床。6:10に伊藤コーチのGPSの電源が入れている。6:25にはテントを撤収しているが、この時点で雪がすでにかなり降っている。(伊藤写真=①=)。テント一式・スコップは安西、ロープは櫻井、その他を伊藤が持って、全員アイゼンをはき、6:30頃出発。ハーネスはつけていない。

7:30に1598mで休憩(安西写真、GPS)。8:03～8:08の間も1844m付近で休憩している(櫻井、安西、GPS)。この時点ですでに、伊藤-櫻井-安西の順で歩き、若干間隔が開いていたことが分かるが、櫻井には笑顔が見られる(伊藤写真)。二つ玉の低気圧で完全に冬型気圧配置がきまり、黒部流域の景色は昨日と比べると別世界の様に白くなっている。標高1900m以上はガスが濃くかかっている(安西、櫻井、伊藤写真=②=)。

9:19にも1999m地点で休憩している(GPS)。二時間で高度差400mのペースだ。ここは赤沢岳北西尾根へのエスケープの

分岐であるため、進退の判断が迫られる。ここで稜線まで上がる判断がなされたと思われる。

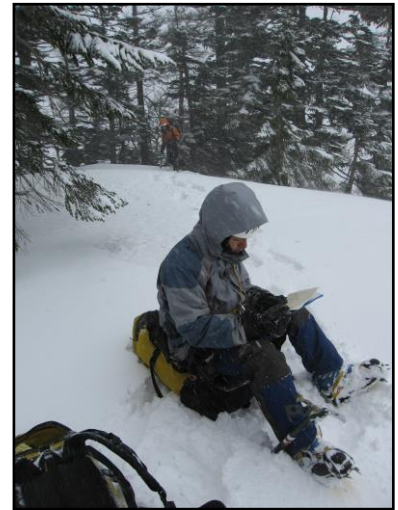


②4/26 8:05 1844mから黒部別山



③4/26 11:23 「2300m分岐付近」

11:23 に樹林帯内の西尾根のジャンクション（標高約 2290m 地点）で休憩（伊藤写真=③④=）。視界は 100m ほどか、ガスのため対岸の別山は全く見えない。新雪も 10cm ほど積もっている。この時で安西はかなり遅れてきている（伊藤写真=④=）。



これ以降は写真がないため、伊藤のGPSの記録と京大山岳部や警察からの遭難現場の状況報告からの推測となる。ちなみに櫻井の所持していたGPSは、記録時間が9:23から11:19までであったため（何故かはわからない）、有効な情報は得られていない。

伊藤のGPS（精度2~2.5m）によると、最後の写真を撮影したあと、主稜線までの高度差300mを二時間半かけて登り、14時過ぎに主稜線（鳴沢岳西尾根の頭）に着いている。一般に、樹林帯を抜けると風は格段に強くなるが、鳴沢岳西尾根の樹林帯（約2450m）を抜けてからも特にペースに極端な乱れはないため、行動できないほどの風ではなかった可能性もある。

④11:24 休憩中の櫻井。背後に安西。

大町の気象記録によると14:20から西向きの風が強くなりはじめ、平均風速5~10m/s（瞬間最大風速15m/s）ほどの強風が数時間続いたようである（町ではビニールハウスが飛び、信号機が折れ曲がるほどの強風が吹いたらしい）。下界でも異常なほどの風が吹いていたということから、おそらく2600mの稜線も、14時の時点ではかなりの強風（おそらく西風）が吹き荒れる状態だったに違いない。

また安西・櫻井の死亡推定時刻は二人とも16時ごろという検死結果があり、15時すぎに大きな異変が起こったと考えられるが、この時間帯の稜線上の天候を正確に想定することは難しい。

・主稜線（鳴沢岳西尾根の頭）に出たあと、14:04から速度が遅くなり（14:04~14:22は分速10m未満）、立ち止ったり進んだりしている（14:02、14:09~14:16は静止している）。

西尾根の頭~山頂手前（水平距離約130m、高低差24m）の間の移動に35分かかっている。

→①後続を待っていた。安西が遅れていた可能性が高い。

②赤沢岳との分岐になるのでルートを確認していた。

③10分ほど強風がふいて動けなかった。 ④単に休憩していた。

・10分以上たって（14:18から）再び速度が上がり、鳴沢岳山頂手前（最高到達地点は14:39に1637mである）まで至っている。この間、水平距離的にして100~120mほどだがおよそ35分かかっている。14:43で再び静止している。

→①後続の姿が見えたか追いついた。 ②ルート確認あるいは休憩が終わったので進んだ。

③風が弱くなった。←なぜ引き返さなかったか？

④後続があまりにも遅く、この先進んで離れても危険がないと判断した。

・そこから稜線の岩稜を避け、北側斜面をトラバースするように動いているが途中で速度が落ちている（15:01~15:19はほぼ分速2m未満、15:15には静止している）。

→①雪庇の回避、および歩きやすさから雪面のトラバースをする。強風のため雪面が凍りつき、容易に進めなくなってスピードが落ちた。15時すぎ、トラバース中に櫻井が滑落したのを伊藤が

気づき、その行方を確認しようとしていた（実際、滑落開始場所付近に多くの足跡があったという大町県警からの報告もある）。櫻井の遺体の位置（稜線から80m北側。斜面下方）や状況（メインザックを背負っていた。ズボンにカギ裂き多し）から考えても滑落は間違いないと思われる。

・しかし伊藤が実際に助けに下りることはなかった。

→①強風の上、視界が極端に悪いため無理（危険）だと判断した。※ロープは櫻井が所持していた。

②体力的に自分の命を守るので精一杯で余力がなかった。

③一旦先のコルに下りてからトラバースで一段下を探しに行こうとしたが、余裕がなくなった。

④櫻井の滑落の瞬間は見ておらず、ついてこないのおそらく滑落したと判断したが、どこを探せばいいか分からなかった。南側に落ちているかもしれなかった。

・その後、伊藤はルート通りに独り新越山荘に向かってゆっくり進み、16:00にコルに着き、16:10に小ピークの手前でGPSの電源が切られている。15:30ごろに再び速度が落ちている。

→なぜ伊藤は安西のところ（鳴沢岳山頂方面）へ戻らなかったのか。

①後続していると思っていた安西も櫻井と同時に滑落したと思った。

②すでに安西を完全に見失っているため、余力がなく、自分の命を守ることに専念した。

③ルート上で雪洞を掘れば、安西が追いついた時にすぐに入れると考えたが、雪洞を掘れる場所がなく、新越山荘側に探しに進んだ。15:30頃に速度が落ちているのは、雪洞を掘ろうと試していたのかもしれない。

→切る必要のないGPSが切れている理由。

①偶然、突起がスイッチに当たりオフにした。あるいは極度の低温のため、自動的に切れた？

②故意の場合、GPSのデータを知られなくなかった←捨てればいいのか？

あるいは極度の低温のため動かなくなったので電源ごと切った。

・最終的に伊藤も、16:10にGPSが切れてから、50mほど進んだところの、小ピークの北に延びる尾根の風下側（東側）吹き溜まり（風上斜面であるため雪洞適地ではない。掘り進んですぐにハイマツが出てくる。京大の偵察報告によると「雪面をならしただけのほぼオープンビバークに近い雪洞」）に、おそらくピッケルで（スコップは安西がもっていた）2×1×1mの雪洞を掘った（かなり時間がかかったと思われる）。そこから安西、櫻井を探しに行ったかは不明。

最終的に出来上がった雪洞に、着のみ着のままめぐりこんだと思われる。入口はザックで塞いで座り込んでいたが、風上側の強風により雪が吹きこんでくるためろくな休息もできず、対処もできず、体温を奪われたまま深夜にかけて息を引き取ったと思われる。

一方、安西は鳴沢岳の手前（山頂から赤沢岳方面におよそ30m）で山頂の方へ進もうとした形で倒れていたと報告されており、伊藤・櫻井の姿は完全に見失った後で、強風のため動けなくなったのではないかと考えられる。安西の発見場所から考えて、稜線（西尾根の頭）に出たから100mの間で動けなくなったか（この場合その100mの間に約2時間いたことになる）、稜線に出た時点でかなり離れていたことが考えられる（この場合、伊藤は安西を待たずに稜線を進んでいったことになる）。